

## 中国の食糧貿易と食糧安全保障

報告者 顧国達（浙江大学経済学院）

中国は世界最大の食糧生産国であるが、人口も多いことから、アメリカのような輸出余力はなく、中国の食糧政策は国内の需給均衡が基本となっている。中国の食糧生産量は一定の波動性を有しながらも増加傾向にあり、2000年代初めは減少・停滞していたものの2004年からは政府の生産支援策が強化されたことによって再び増加を続けている。

米、小麦、トウモロコシの生産割合は比較的安定しているが、食糧生産地域には変化が見られる。黒竜江、吉林、遼寧、河北、山東等の東北地域に食糧生産が集中するようになり、江蘇、安徽、江西、湖北、湖南等の南方地域の食糧生産量の割合が減少している。また、沿海都市部の食糧不足量が拡大している。

中国の食糧貿易は、年によって変動はあるものの、輸出はほぼ横ばいであり、輸入は増加傾向にある。ただし、輸入の品目構成は大きく変化した。1990年代の前半まで中国の食糧輸入では小麦が大きな割合を占めていたが、近年では大豆の輸入が急増しており、2009年には輸入量が5,000万トンに達するとの見通しもある。

世界的に食糧生産の伸びが食糧消費の増加に追いつかないことが懸念される中で、食糧安全保障は中国にとっても重大な課題である。

世界耕地面積に占める中国の耕地面積の割合は7.2%に過ぎず、中国の1人当たり耕地面積は少ない。しかも近年は都市化等の影響で耕地面積は年々減少する傾向にあり、必要な耕地面積を維持することが食糧安全保障にとって重要である。このため、中国政府は今後とも18億ムー（1.2億ヘクタール）の耕地を維持するという目標を定めている。

農業用水の不足を解消することも重要な課題である。中国の南方は比較的水は豊かであるが、北方の水不足は深刻である。黄河の断流はその1つの表れである。このため、揚子江等の南方の水を北方に引くための南水北調と言われる工事が現在進められており、2013年に完成の予定である。これによって北方に運ばれた水は、飲用水、工業用水に利用されるほか、農業用水としても利用される。

食糧消費に直接的な影響を与える人口については、計画生育制度（1人っ子政策）の実施によって今後とも大きな増加はない見込みである。中国の人口は今後とも緩やかな増加を続けるが、2030年ごろにピークの15億人に達するものと予測されており、それ以上は増加しない。1人っ子政策は今後とも維持されることとなる。

食糧安全保障にとっては国際協力も重要である。中国はこれまでアフリカ、南米等の各国に農業技術協力を行ってきたが、近年では外国で農地を取得し、投資を行って農業生産を促進することも行われるようになってきている。ロシアでは黒竜江省の農業企業が63万ムー（4.2万ヘクタール）の農地を取得して農業生産を行っている。また、ブラジルでは浙江省の事業者が1.8万ヘクタールの農地を購入して大豆、小麦の生産を行っている。この事業者は、将来は5万ヘクタールまで規模を拡大する計画である。このほかにもアフリカ諸国で投資による生産が多く行われるようになってきている。ただし、これらの生産は民間主体によるものであり、政府の食糧確保活動の一環として行われているとの情報は無い。

中国では食糧の単位収量が先進国と比較すればまだ低く、その面でも食糧増産の余地は残っている。中国政府は食糧安全保障を重視しており、食糧輸入は5%以内にとどめて95%は自給するとの方針は今後とも堅持されることとなる。

（文責：河原昌一郎）